



TITLE:

雑詠

AUTHOR(S):

岸, 亮聿

CITATION:

岸, 亮聿. 雑詠. 天界 1940, 21(235): 14-14

ISSUE DATE:

1940-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168101>

RIGHT:

//	5	//	172
//	6	//	197
//	7	//	203
//	8	//	184
//	9	//	118
//	10	//	39

これはまづ平均の光度曲線のやうなものであるが、極大は飛行道の $\frac{6}{10} \sim \frac{7}{10}$ 邊にあるものが多いのを示して居る。

上の結果は、1929年九月25日—1930年一月4日の観測期間中の、258個の流星を材料としたのであるが、又、それから極大の有様を區別して、數へあげてみたものでは、

Scharfes einfaches Maximum höchstens $\frac{2}{10}$ der Bahn:	41個 (15.9%)
Langes flaches Max., mindestens $\frac{6}{10}$ der Bahn:	97 (37.6%)
二つの極大 doppeltes Max.:	6 (2.3%)
Max. in der ersten Hälfte der Bahn:	20 (7.7%)

兎に角、此の材料では、Öpik 氏のやうに極大が急なのは尠くて、著者ホフマイスタ氏は幸であつた。

6. 流星速度とその光の有効波長 effektive Wellenlänge との関係

Öpik 氏の式を正しいとすると、速度が増せば、此の波長は減することになる。著者ホフマイスタ氏 (z. B. Naturw. Wochenschrift (N. F.) 18, Nr. 14, p. 191) の観測によれば、さうならぬさうである、最高温と強い青色光は m が大なる流星が大氣の深層迄飛び込んできた時に起り、其の時は、 v は小さくなつて居る。

面白い一例を著者ホフマイスタ氏は引用した、1921年八月17日の大流星は、よく研究されたものであるが、道筋 700 km の長さが観測できた中、初めは色赤く、後に黄色と變り、600 km 邊で、初めて青緑となつた。速度が緩くなり質量が小になる程、光度 Helligkeit は大きくなると云ふ思考にうまくあてはまつて居る。

雑 詠

岸 亮 肆

星 涼 し 一 番 星 や 二 番 星
見 えて ゐ る サ ソ リ 星 座 や 門 涼 み
星 涼 し 中 に 赤 き は ア ン タ レ ス
島 の 灯 と 星 と ゆ ら げ り 夜 光 蟲
會 堂 を 出 て 仰 ぎ け り 天 の 川